

# 聖なる水の力による稲の早苗の成長への祈り

— 春日社の御田植の祭と春日社旧神領の

水口祭における松苗儀礼の分析から —

川 合 泰 代

## 1. はじめに

奈良の水田では、松苗や杉苗とよばれる稲の早苗を真似てつくった模造苗が、各家の水田の水口に季節の花や寺社仏閣のお札などとともに飾られている風景をみかけることがある。このうち、かつて春日社の神領であった地域の水田には、毎年ゴールデンウィークのころに、春日社の御田植の祭によって春日の神の気が込められた松苗と呼ばれる稲の模造苗が、水田の水口に飾られていることがある。

本稿は、松苗を用いた春日社の御田植の祭と、この松苗を用いた水口祭の儀礼を分析することを通じて、奈良の春日社旧神領に生きた人々にとっての春日の神への信仰世界の一側面を明らかにするものである。

春日社の御田植の祭は、中世初期にまでさかのぼることができる古くからある祭である。奈良県下では、春日社の御田植の祭と類似する御田植祭が、東大寺境内の手向山八幡宮や天理市の石神神社、三輪の大天神社や吉野水分神社などの大きな神社や、様々な村々の鎮守の神社などで行われている。

武藤（2006）によれば、奈良県下にみられる御田植祭は、田遊びに相当する御田植祭がほとんど

で、年の初めなどに、牛役や田男役が、砂をまいた神田を耕したり、松葉でつくった苗を植えたりなど、模擬的な農作業を演じる。年初の予祝儀礼としての田遊びがこれほどよく見られる地域は珍しく、日本で行われる御田植祭の多くは、早苗を田に植え替える田植の時期に、田植え歌を歌ったり踊ったりしながら、実際に田植えを行うものである。

藤本（2008）は、奈良では「オンダ」（御田）と呼ばれている、田遊びの系統に属する奈良県内の各村々の御田植祭を詳細に調査した。その報告によると、行事の奉仕者は、神社ないし伝承地区の役員や水利組合員などである。県内の各地域でほぼ共通する要素は、牛耕の所作、農作業の過程で田植えまでしか演じない点、行事後に早苗に見立てた模造苗を配布する点、模造苗を苗代播種時に利用することである。模造苗は、松や杉などの植物で作られ、これに種籾が添えられていることが多い。奈良県の平坦部では、模造苗は松苗の使用例が最多である。模造苗は、苗代播種の際に、主に水口に寺社の札や花などを添えて飾られる。奈良県の平坦部の人々は苗への意識が強く、苗を移植する田植えは苗代作業の延長としてとらえる傾向がある。藤本は、オンダ行事から、人々の苗に対しての強いこだわりがよみとけると指摘し、オンダ行事は、種籾から苗代播種を経て、苗が田

に移植される田植えの段階までを中心とした祈願行事であり、その効力は主に苗代段階において期待されたものである、と指摘した。

春日社の御田植の祭や、そのほかオングなどで配布された松苗などの模造苗は、水口祭の時に、各農家の水田の水口に飾られる。徳田（1981）によれば、奈良県では正月11日、3月や4月の初蒔きの前、初蒔きの頃、田植え前の頃の、4つの時期のいずれかに、水田の水口に、松や杉で作られた松苗や杉苗などの模造苗を、お米、お花、寺社仏閣で配るお札などととも、水田の水口に供えることが多い。時期としては、初蒔きの頃が一番多く、これをヨコテ祭、苗代祭とも呼ぶ。

先行研究において、奈良県下の御田植祭の諸相や水口祭の研究に関しては、上述の研究も含めていくつかの研究がみられるものの、春日社の御田植の祭とその祭で用いた松苗を使った水口祭を、連続した祭として取り扱った研究は皆無である。また、春日社旧神領の人々からみた春日信仰を、松苗儀礼から分析した研究も皆無である。本稿はこの点において新しい。

## 2. 春日社の神々と水

春日社は神護景雲2（768）年に藤原氏により創建された神社である。それ以前は、この一帯には榎本社があった。春日社ははじめ、常盤国の鹿島の神であるタケミカズチの命、下総国の香取の神であるフツヌシの命を祀り、その後河内国の枚方の神であり、藤原氏の祖先神であるアメノコヤネの命とそのヒメ神の四神を祀った。

本章は、大東（1995）と横山（1996、1997）の先行研究に負うところが大きい。

春日社の本社である四神の中心となる神はタケミカズチの神であり、その根幹は水神である。こ

のことは大東（1995）は、史料や、第一殿のタケミカズチの命を祭る第一殿の右奥に浮雲の井という井戸があることなどから指摘する。

古代の春日信仰はタケミカズチの命への信仰が中心であり、藤原氏の氏神としての側面が強かった。しかしながら中世以降、春日信仰は中世初期に誕生した若宮社への信仰が盛んとなった。若宮社は、本社四神と同格扱いされ、本社とは異なる独自の祭祀集団を幕末まで抱え続けた。中世から幕末まで、本社四神は大宮と呼ばれ、若宮社は若宮と呼ばれた。本稿では若宮社のことを、若宮と呼ぶこととする。この若宮を支えた人々は、若宮の祭祀に深く関わる興福寺であり、また大和国の農民を中心とする庶民であった。中世から近世にかけて、春日の若宮は、大和国の人々によって深く信仰される存在であった。

春日の社伝による若宮の祭神名は「五所の王子」であり、若宮の出現に関しては、春日社の古伝である長承4（1135）年の『長承注進状』の中の「若宮御根本縁」の末尾に、「依見出、長保5（1003）年巳時、從四殿板敷、心太ココロフトヤウナル様者三升許落、暫程在、從件物中仁五寸許ナルクチナハ蛇出、從乾柱下登、入四殿内畢、隨彼心太様者失畢、即時、神宮預是忠奉見記之、」とあり、若宮は、本社比売神を祀る第四殿の床裏に生じたトコロテン様の物体から小さな蛇として現れたとされる。若宮は初めの姿が、水の精である蛇なのである。若宮は長承年間の洪水飢饉のときに創建され、保延2（1136）年から大和国一の祭である春日若宮おん祭が始められた。若宮は、その誕生のいわれや、創設時期からも、水神の要素が強い。若宮にも、タケミカズチの神と同様に、社殿の手前に若宮の井と呼ばれる井戸がある。

春日社の神体山である御蓋山山頂にある本宮神社や、その背後にある春日山山頂付近にある、高

山神社、鳴雷神社、神野神社、上水谷神社、大神神社の五社は、春日信仰において重要な神社群であるが、その祭祀に関しては、春日の神職がかかわることがあったものの、その支配権は平安後期から幕末まで興福寺が握っていた。これら6つの神社はすべて、水神である。

御蓋山山頂の本宮神社は、タケミカズチの命が鹿島から春日に降り立った場所であり、春日信仰のきわめて重要な聖地である。ここは、中近世にかけて、水神、殊に祈雨神として信仰され、雨乞いの神事が盛んに行われていた。昭和16(1941)年に発見された経塚遺跡の出土品から、中世から近世にかけて、興福寺僧侶徒らによる祈雨祈祷の跡がうかがえる。

春日山の五社は、雨乞いの聖地としての信仰が厚かった。近世には農家の要請により、祈雨祈願のために神官数名が登山し、高山神社、鳴雷神社、神野神社、上水谷神社、そして御蓋山山頂本宮神社へと巡拝し、百座、二百座の中臣祓を上げるのが通例であった。五社のうち、鳴神社と神野神社は春日山の分水嶺に位置し、雨水を受ける天水系の水分神であり、高山神社と上水谷神社は湧水湿地に位置し、大地から水が湧きでる地水系の水神である<sup>1)</sup>。

春日山の五社のうち、鳴神社は、貞観元(859)年の『三代実録』に初見する式内の古社で、2月と11月の祈年祭と新嘗祭は中央から中臣の官人が差遣されており、中央においても重視されていた神社である。神社の前方には、神社が見下ろす形で龍王池という池がある。鎌倉初期成立の『古事談』(第五神社仏等)には、「室生龍穴者善達竜王之所居也、件龍王初住猿沢池、昔、采女投身之時、龍王避而香山春日山南也、件所下人棄死人、龍王亦避住室生穴…」とあり、龍神が、初めは猿沢の池に住み、その後春日山の南の香山を示

す鳴神社に移り、最後に室生龍穴に移ったという内容が書かれている。寛正2(1461)年9月24日条の『大乘院寺社雑事記』にも「当竜王ハ善女竜王ナリ、室生山ノ本所云々」と記されている。神社の前の龍王池は、いかなる炎干でも枯れないといわれており、中世以降祈雨の聖地として、信仰されつづけてきた。興福寺の僧侶はここで八講を修した。昭和初期に社前の龍王池から発見された石製塔婆である経筒には、正安3(1301)年に祈雨儀式を行ったところ雨が降ったという内容の銘文が彫られていた。近世以降近年にいたるまで、近隣の村々でも信仰の対象としてこの龍王池の水をいただいたりしており、なかには雨乞いのためにご神体を盗む村があったりした。なお、鳴神社という名称は明治8(1875)年からで、それ以前は一般に香山龍王社と呼ばれていた。

猿沢の池や鳴神社の龍王池に住んだと信じられる龍神が落ち着いたとされる室生は、古代より龍神信仰の聖地として、祈雨、止雨を祈る場所であった<sup>2)</sup>。室生龍穴への国家的な祈雨は、弘仁9(818)年の『日本紀略』を初出として、平安時代だけでも37回に及ぶ。室生寺は、平安京遷都に際し、地相を占った僧の一人である興福寺僧賢憬によって建立され、興福寺の影響の極めて強い場所であった。室生寺は龍穴神社の神宮寺であり、室生龍穴は龍穴神社のご神体である。

同じくこの龍神が初めに住んだとされる猿沢の池は、古くから龍神信仰のあった池である。中世の『興福寺流記』には、猿沢池は龍神の住む池で、どんな干ばつにも水が枯れないとある。応安3(1370)年の8月の条の『細々要記』にも、猿沢の池から午の時に龍が昇天した記録がある。

中世に作られた能である「春日龍神」は、春日の神が明恵上人の入唐渡天を思い止まらせようと、能の後半で春日の神は龍神となって明恵上人

の前に現れ、釈迦の一生を明恵に示し、最後は猿沢の池に姿を消すという物語である。この物語からも、中世の春日信仰において、春日の神が龍神として信仰されていたことがうかがえる。

また、近世までは興福寺が主催した春日若宮おん祭のお渡り式では、馬長<sup>ばちやうのちこ</sup> 兄<sup>ひしよ</sup> に従う被者が、龍の作り物を乗せた龍蓋をかぶる。これは、五穀豊穡を願い雨乞いを祈る意味が込められていると口伝されている。この姿は、近世のおん祭を描いた祭礼絵図でも、ほぼ同様の姿で描かれている。ここからも、若宮信仰が龍神信仰と重なっていたことがうかがえる。

民間における水神信仰としての春日信仰としては、室町時代からの祈雨神事として、雨乞い踊りや参道に燈籠をあげることが流行したことがあげられる。たとえば、『大乘院寺社雑事記』の文明7(1475)年7月28日の条には、南都の郷民が雨乞いのため、社頭から興福寺南円堂まで「郷々の燈籠を懸く」とある<sup>3)</sup>。江戸の中頃になると、雨乞い行事として、猿沢池の底掘り、春日御間道の百度参り、万燈、念仏踊りの一種であるナモデ踊りなどが行われていた。

以上のことから、春日社は、創建当初から水神としての要素が強かったものの、若宮が創建された中世以降は、若宮や鳴神神社、本宮神社や春日山の五社、猿沢池や龍神池や室生龍穴につながる龍神信仰などを通じて、水の神として、特に祈雨の神として、広く大和国の庶民に信仰されていたと考えられる。

一方で春日では、木々の青々さを重視する信仰文化がある。春日社の神体山である御蓋山やその背後の春日山は、長く人々の立ち入りが禁じられてきた場所であり<sup>4)</sup>、神の坐す聖地であった。中世の春日では、御蓋山や春日山の木々が青々としていることが、山に神が坐す証であり、山の木々

が枯れていることは、山から神が去った証であるという物語が、広く信じられ続けた。実際に、山の木々が枯れたという現象が、鎌倉初期から江戸時代末期までに十数回起こっている。この「神木<sup>しんぼく</sup> 枯槁<sup>ここう</sup>」が起こった場合は、中臣氏による七日七夜の祈祷や、特別の神田で収穫された霊穀を奉納するなど、所定の形式の儀式を行えば、神は山に戻ると信じられていた。

木々の青々さの青とは、木々が青々と茂っている様子をさす。春日の信仰文化では、木々を生命のエネルギーに満ち溢れた青々とした姿にするのは、神の力によると信じたと考えられる。中世から近世にかけて作られた春日曼荼羅では、御蓋山や春日山や春日社境内の木々が青々とした様子で描かれており、この曼荼羅は今なお奈良の町の人々によって信仰されている<sup>5)</sup>。

春日では、木々の中でも一年中葉が青々と茂っている、榊や杉や松を重視した。榊は、春日明神の御正体を現す神聖な木であった。杉は、古代からある春日四社のご神木として、松は、中世から始まった春日若宮のご神木として重視された。たとえば春日本社では、中世の『春日権現験記絵』に影向の杉が描かれており、現在でも本社境内には大きな杉がある。一方若宮では、大正末まで若宮境内に大きな松の木があったことや、春日若宮おん祭の御仮屋は松で作られることや、おん祭で芸能が披露される場が影向の松であることなどがあげられる。

以上のことから、中世以降の若宮を中心とする春日信仰を端的にまとめると、水への信仰と、青々とした木々への信仰ということが出来る。また、植物は水を吸収して青々と茂ることから、この二つの信仰の根は一つであるといえよう。水の力によって木々が青々と茂るという思想は、陰陽五行の五行の思想<sup>6)</sup>に照らし合わせてみても、水は木

を生む性質があることから、これは五行の循環の思想にも当てはまるものである。

### 3. 春日社の御田植の祭

春日社の御田植の祭は、平安末期の長寛元(1163)年に始まり、近世までは毎年正月八日以降の申の日に行われ、明治5(1872)年からは、3月15日に行われている。

春日社では、明治元(1868)年の神仏分離令や、その後の興福寺の廃寺などをきっかけに、神社が大きく再編された。近世まで興福寺の影響が強く、春日本社とは異なる独自の神職や巫女を抱えていた若宮は、明治になり春日本社の摂社となった。そして、若宮に常駐する神職や巫女などはなくなった。また明治になると、近世までの太陰太陽暦から、太陽暦に変更された関係で、祭の日程も変更されることが多くなった。明治以降、祭の奉仕者や日程などは再編されたと考えられる。

現在の春日大社では、午前10時から春日本社中門御廊の座にて神職たちによって行われる儀式を御田植祭りと呼び、その後午前11時頃から行われる巫女たちの田舞などを御田植神事と呼んでいる。現在では、神職も巫女も春日本社に属している。本稿で取り扱う祭は、現在は御田植神事と呼ばれている祭りである。史料では、後述のようにこの祭を、単に田植と呼んでいる例が多い。本稿では便宜上、歴史的に行われてきたこの祭を、春日社の御田植の祭と称することとした。

春日社の御田植の祭の特徴は、以下の先行研究により、若宮の拝殿巫女が中心となって行ってきたこと、正月の申の日を重視し続けてきたこと、この申の日取りは水を意識したものであったこと、祭の頃の天気や大地に水の気配が現れることを吉とする思想があったことがわかった。

大東(1996)は、御田植の祭を史料から明らかにした。大東によれば、若宮神主の日記『中臣祐定記』の寛元4(1246)年の1月18日の条に、「今日、田植の義あるべくも、行幸の還御、酉の刻の間、夜に入る田植えは不吉の旨、巫等に申す、延引して晦日たるべきの由云々、」とあるのが、現在確認できる御田植の祭の最古の記録である。この内容は、この年の1月8日以降の最初の申の日である18日は、たまたま嵯峨天皇の春日行幸と重なったので、次の申の日の30日に延期したというものである。なお、同じ『中臣祐定記』の正応2(1289)年の1月11日の条に、「次に、若宮田植も来る十六日に相当すると雖も、今度の申日二十八日に勤任せしむべき由、拝殿へと祐春下地する」とある。この二つの史料から、御田植の祭は申の日に行くことを重視し続けてきたことがわかる。また、春日の御田植の祭が若宮の拝殿巫女を中心に執り行われていたことも、巫等、拝殿の記述からわかる。

鹿谷(1990)は、御田植の祭が継続的に行われつづけてきたこと、当初から御田植の祭が若宮拝殿の巫女を中心に行われていたことを指摘する。『春日者記録二』の「中臣祐賢記」における文永10(1273)年の正月18日の条には、「田ウへ祐賢下知拝殿云々、近代若宮ノ田ウへ無下略定之条、以外次第也、速如昔可被致丁寧之由、以神殿守春任申送之、仍今日丁寧云々」とあり、ここからこのときすでに御田植の祭が若宮によってなされるのが当然となっていたことが伺える。延宝8(1680)年の「春日社年中行事」には、「上申日自七日以後、巫女等勤仕御田植、而除凶年難祈於年穀豊者也、之式自長寛元年始而行之」とあり、ここからも御田植の祭が巫女中心で行われていたことがわかる。なおこの史料からは、御田植の祭がその年の穀物の豊作を祈るものであったことも

伺える。

元文5(1740)年の『南都年中行事』からは、江戸時代中期の御田植の祭の様子がわかる。「御田植役人は若宮拝殿から務める。早乙女四人拝殿 女藪・・御田三箇所 若宮拝屋 大宮林檎庭 榎本社石壇の下…松苗、櫛等は早苗を表す…」。ここから、この時期には、若宮や巫女が中心となって御田植の祭を行っていたこと、御田植の祭を行う場所が現在と同様に、若宮、大宮、榎本社社の3か所であったこと、松苗は早苗を表すものであったことなどがわかる。

吉野(1993)は、春日社の祭が申の日に多く、この理由の一つに申が水と関わるからであることを明らかにした。吉野によれば、春日大社の例祭である春日祭は、明治維新前は毎年2回、旧暦2月と11月の上申日に行われており、別名「申祭」といわれたこと、春日の聖地である御蓋山には、本宮神社や高山神社、鳴神神社など多くの摂末社が祀られているが、そのご祭神の多くが水の神であり、その祭日が水と関連する日取りとなっていることを指摘する。吉野によれば、申は12干支のうち、申・子・辰の水の三合の始まりを表し、申の日取りを選ぶことは、水の始まりを表すとしている。吉野の指摘から、御田植の祭が申の日取りを重視した理由として、水への信仰があったことがわかる。

奥野(1981)が取り上げた興福寺の大乗院や多聞院の記録からは、御田植の祭の頃の天気や大地に、水の気配が現れることを吉とみなす思想があったことがわかる。『大乗院寺社雑事記』の文明5(1473)年正月16日の条には、「春日御田植也、田舎輩参詣、深雨也、為田作吉事歟」とあり、御田植の祭の時に降った深雨を田作りの吉事とみなしている。また、『多聞院日記』一の永禄9(1566)年正月15日の条には、「御田植在之、曉

ニ少雨下、一日天気快然、夕部ニ少雨下、仕合一段、熟年之瑞相也云々」とあり、御田植の祭の朝夕に雨が降ったことを、水が豊かな年になる象徴とよみとり、吉としている。同日記の天正19(1591)年正月23日の条には、「近日當社御田植在之、足元濕潤一段吉兆、珍重々々」とあり、御田植の祭が近づいて、大地が湿っていることを吉兆とみなしている。『多聞院日記』四の天正20(1592)年正月11日の条には、「當社御田植壬申日也、雨降豊熟之瑞、珍重々々」とあり、御田植の祭で雨が降ったことから水の豊熟さを読み取り、珍重なこととしている。

次に、現在の御田植の祭の様子を記す。現在は御田植神事と呼ばれている御田植の祭は、大きく分けると三つの所作から成り立つ。まず初めに、農民に扮した神職たちによる田づくり、次に巫女たちによる田舞、最後に巫女たちによる稲の種籾と松苗と小さな角餅を大地に蒔く所作である。御田植の祭は、牛役、牛使い役、田主、楽人たち、早乙女の巫女たちにより行われる。筆者は2007年3月15日に見学した。

午前11時ごろ、若宮で神事の身支度を整えた人々は、若宮から春日大社の本殿前にある林檎の庭へと歩いていく。そして、本殿に向かって左側に巫女たちが、右側に音楽を奏でる4人の神職たちが並ぶ。この間の空間を田に見立てる。

まずはじめに、牛使いが牛に唐鍬を曳かせて田を耕し、次に田主が鍬で田を耕す。次に牛使いが牛に馬鍬を曳かせて田を耕し、最後に田主がこまざらえという農具で田をならす。これで稲の種籾をまく前の田づくりが終了する。

次に、六人の巫女たちが田の中で、以下の歌に合わせて田舞を舞う。1歌は2度、2歌は1度、3歌は2度、のべ合計5歌、歌われる<sup>7)</sup>。

1 歌：わかたね うえほよ なえたね うえほ  
よ おんなのてに てをとりて ひろひ  
とるとよ ヤレヤレ…

2 歌：みましも しげや わかなえ とるてや  
は しらたま とるてこそ しらたまな  
ゆらや とみくさのはな ヤレヤレ…

3 歌：ふくまごくに ほんごくへ うえちら  
し てにてをとりて ひろひとるとよ  
ヤレヤレ…<sup>8)</sup>

1 歌は、若種植えほよ、苗種植えほよ、とあるように、稲の種籾を植える歌であり、2 歌は、若苗とる、とあるように、苗代田から茂った早苗を取る歌であり、3 歌は植えちらし、とあるように早苗を田に植える田植えの歌である。舞は歌の歌詞に沿った舞である。そして、3 歌の 2 回目の「うえちらし」の時に、巫女が箕の中の松苗二束を一束ずつ、手で田に落とし、そのあとに箕の中の稲の種籾と角餅を、松苗の上に撒き落とす。図 1 は、巫女が松苗を田に蒔く様子である。そして、ヤレヤレの歌とともに巫女が田から去る。これで終わりである。終わった後は、参詣者たちがござって、舞の後の田に見立てた庭に入り、蒔かれた松苗や稲の種籾や角餅を拾う。



図 1 春日社の御田植の祭で、  
巫女が松苗を田に蒔く様子

御田植の祭は、はじめに春日大社本社で行われたのち、同じ神事を榎本神社の前、最後に若宮の前で行う。そして午後 12 時 15 分ごろ、祭はすべて終わる。

以上のことから、春日社の御田植の祭の特徴をまとめたい。現在の御田植の祭は、田づくり、稲の種籾植え、早苗の田植えの農作業を、季節を先取りして神の前で行っていた。これは、稲作の予祝儀礼と呼ぶことができる。予祝とは、あらかじめ祝ってしまうことで、あとから続く現実がその通りになることを祈るものである。正月や年の早い時期に行われる田遊びがこの類いの稲作儀礼に属す。春日社の御田植の祭は、まさにこの予祝儀礼に属する。そして人々は、この儀礼を春日の神の前で行うことを通じて、春日の神の力が、祭で用いた稲の種籾や松苗や角餅に込められたと信じただと考えられる。

それでは、春日の神の力とは何か。儀礼で大地に蒔かれたものが稲の種籾と早苗に見たてた松苗と角餅であったことから、春日の神は稲の種籾を早苗に育て、餅が象徴するような米に育てる力があると、人々は信じていたと考えられる。つまり、稲を实らせる力である。その中でも、儀礼が稲の種播きや早苗の田植えを重視し、また松苗を重視していることから、人々は春日の神が、稲作の一連の行事の中でも、稲の種籾を青々とした松苗のような早苗に育てる力があると信じていたと考えられる。

この儀礼は長く、若宮の巫女が中心となって行ってきたことから、御田植の祭を通じて人々が祈った春日の神とは、春日の若宮を中心とした神であったと考えられる。そして、この儀礼が申の日に行われてきたことから、人々は春日の神に、水に関する聖なる力を期待したのだと考えられる。

#### 4. 春日社の松苗

春日社の御田植の祭で用いられた松苗は、図2である。2〜3本の松葉の枝を束ねて、根本の方を紐で結んである。松苗の根本の方の内側には、5粒ほどの稲の種籾が、白い紙である御幣に包まれていて、それを松の枝葉で包んでいる。図3は、その稲の種籾である。松苗は、稲の種籾と松の葉から成り立っている。この松苗は、稲の種籾が発芽して、青々と茂る早苗になった姿を象徴していると読み解くことができる。松苗の姿は、稲の早苗そのものである。



図2 松苗



図3 松苗の中に包まれている稲の種籾

松苗に関する研究は、大東（1996）によるものがある。大東によると、松苗に関する古い記録は、春日の社記『春夜神記』にある。この本はいくつかの書写本が存在するが、最も古いものは前田家の尊経閣所蔵本で、永享9（1437）年の奥書がある。原文は漢文体であるが、本稿では大東による読み下し文を載せる。「大明神、枚岡より南都白毫寺の前なる焼春日に移り住み給う、その後本宮に移ります、（中略）御遷座の後、雷火落ちて之を焼く、故に焼春日という、その前なる田を杉町という、大明神、杉葉をうえ給えばすなわち米となる、故に当時も春日の田植に、杉跡より生え出たる白毫寺の松葉を取りて、之を種く作法あり、杉の木なき故なり云々、この杉町の稲籾を明年出来まで之を置き、御櫛等枯変の時、臨時の神楽にこの米を持ちうる故なり、（下線筆者）」。

このことから大東は、少なくとも室町時代には、春日社に松苗の信仰文化が存在していたことを明らかにした。また史料にある「杉跡より生え出たる松」は、春日信仰が杉を象徴するタケミカズチの命への信仰から、松を象徴とする若宮信仰へと移行したことを象徴するものであると指摘する。

なお、史料の下線部の記述から、春日の神が米を作る力がある神であると信じられていたことが分かる。

以上のことから本章をまとめる。まず、現在の松苗の形が、稲の種籾と青々とした松葉で形作られており、これが青々と茂る早苗を表すものであったことから、この松苗の形は、春日の神が稲の種籾を青々とした早苗にする力があるという思想を視覚化したものであると読み解くことができる。次に史料から、若宮を象徴する木である松の葉を用いた松苗の信仰文化は、かなり古い時代から存在していたこと、そして若宮を中心とする春日の神は、松葉を米にする力があると信じられていた



ことがわかった。

## 5. 春日社旧神領における松苗儀礼としての水口祭

春日社の御田植の祭で用いられた松苗は、近世まで春日社の神領であった農村の、農家の水口祭で用いられる。春日社配布の松苗を用いる水口祭を行う地域は、近世まで春日社の神領であった地域のみである。近世まで、春日社配布の松苗を水口祭に用いるということは、相当の特権的な意味合いがあったと考えられる<sup>9)</sup>。

春日大社の神職である北野治氏によれば、近世まで春日社の神領であった奈良市や郡山市に点在する25町のうち、いくつかの町は、今でも御田植の祭の後、町の代表である自治会長などが松苗を取りに春日社へ訪れる。自治会は、農協や水利組合と連携している場合が多い。筆者は、松苗を取りに春日社へ訪れた方々を中心に、春日社旧神領における現在の松苗儀礼の様子を聞き取ることができた。本稿では、以下の5つの町における聞き取り情報を資料として、春日社旧神領における松苗儀礼としての水口祭の意味を考察する<sup>10)</sup>。

なお、本稿で紹介した町は、すべてかつての農業を生業とする地域であり、町という名称は近世の行政名称である。

### 石川町

2007年5月に石川町の北口建氏にお話を伺った。北口氏は、江戸時代から代々その土地に暮らし続ける農家であり、選挙で選ばれた町の自治会長である。

「自治会は46軒からなるが、そのうち30軒以上は兼業農家で、農業が盛んな地域である。自治会の構成家は、農家組合と水利組合の構成家とは

ほぼ同じである。松苗は、春日社の御田植の祭の後、自治会長が取りに行き、自治会の構成家のうちの農家の家々に配る。松苗は各家それぞれで儀礼を行うものであり、町で行う儀礼はない。松苗は、きれいな水のとっぺんにささげる。つまり、自分の家の田の水の取り口に、松苗をささげるのである。松苗は、つつじやあやめなど季節の花と一緒に飾る。」

図4は、聞き取り調査の時に北口氏の水田の水口に季節の花々とともに飾られていた松苗と、北口氏の苗代田である。水は松苗を通過して、北口氏の田の苗代田へとそそぎこまれる構図となっている。図5は、図4の松苗部分を拡大したものである。



図4 季節の花々とともに苗代田の水口に飾られた松苗



図5 図4の松苗部分を拡大

「この祭は毎年、5月2日から10日頃に行われる。それぞれの農家の苗代の水口に、松苗が飾られる。なお、昔の旧神領は、奉行所の人が出しできないほど、とても強かったと聞いている。」

#### 高畑町

2007年3月に、高畑町の山田耕三氏（当時78歳）にお話を伺った。山田氏は代々その場所に暮らしつづける農家であり、春日社旧神領のまとめ役のような仕事をしてきた。

「3月15日の春日社の御田植の祭があった後、代表者が松苗を取りに行き、そして代表者が、町内の各農家に松苗を配る。昔は御田植の祭にも参加していたが、今はしなくなった。5月2日ごろの八十八夜に、田んぼに水を入れる。この通水のときに、田に松苗を指す。これは、よく稲が育ちますようにという祈りだと思う。昔は、苗代田に水を入れて種をまき、水の取り口に松苗を飾っていた。今は苗代は箱でつくるようになった。今は松苗の祭をやる人のほうが少なくなった。昔は神さまに対して敬信があったし、このようなお祭りはしっかりやっていたが、今の人は、神ごとに対して敬信よりも疑念や否定の感情のほうが強くなってしまったから、多くの人が祭も行わなくなったのではないかと思う。

かつての旧神領は、一段格上の意識があり、旧神領には他の地域の人は手を出せないような感覚があった。

我々にとっての春日社は若宮さんが中心で、春日大社の本社は藤原さんのものという感覚がある。」

#### 井戸野町

2007年3月に、井戸野町の奥田清司氏（当時79歳）にお話を伺った。奥田氏は、代々そこに暮らし続ける農家である。それとともに、春日社

で神へささげられる米を、井戸野町にある春日社の神田で作っている。

「松苗は、旧神領しかもらえない特権的なものである。隣の村は領が違うからもらっていない。井戸野は、周辺の9大字が旧神領で、そこではどこでも今も松苗をもらっている。井戸野だけでも70軒ほどあり、農家の人だけが松苗をもらう。

松苗は、3月ごろにもらってきて、1カ月、家の神棚に上げておく。5月に苗代と一緒に使うが、このときにはすでに茶色になっている。松は、春日さんの山にある松で、30センチほどに切っている。御幣が入っていて、その中に初が入っている。

松苗は、苗代の水口に5月1日～10日頃に指す。そえ花として、さつきやつつじ、チューリップなどを供える。松苗は 稲の苗が青々とそだちますように、という祈りだと思う。

井戸野の水田は山に近い。川の上流の水は、下流の水に比べると水がよく、土がさらさらしていて良質の米が取れるから、川の上流に水田のある井戸野は良質の米が取れる。ただし、収穫量は少ない。」

#### 今市町

2007年3月と5月に、今市町の阪口信吾氏にお話を伺った。阪口氏は農家ではなく、第2次世界大戦後に今市町に開いたケーキ店の店主であり、今市町の自治会長である。

「自治会の構成家は、水利組合の構成家とほとんど重なる。今市町は農家が半分、非農家が半分で、自分は農家ではないが、自治会長になった。自治会長としての初めての仕事が、春日大社へ松苗を取りに行く仕事であった。松苗は農家か、昔農家であった家に配る。

松苗は、竹の木の先を割って、その中に松苗と季節のお花を活け、それを各農家の苗代の水口に

ささげる。今は苗をハウスで作る農家も多いが、ハウス栽培であっても松苗だけは、ハウスの外の田の水口にさしている。農家の人々は、松苗は緑起物として神棚に祀っている。5月の上旬になると、今市町の多くの水田で、水口に松苗を飾る風景を見ることができる。」

### 東九条町

2001年4月に、東九条町の武村健氏（昭和9年生まれ）にお話を伺った。武村氏は、東九条町の水利組合の幹事である。

「毎年3月中旬に水利組合の代表が、春日大社から松苗を100個もらってきて、それを各家に配る。昔は春日講がもらいに行っていたが、今は水利組合になった。水利組合と春日講は参加者が重なるものの、水利組合は田圃を作る人々が参加し、春日講は戦前の地主層が多いことから、春日講よりも水利組合のほうが参加者は多い。

松苗は、水田の端っこである水口に、苗代を植えるところにさす。松苗と季節の花を、苗代の入り口につきさす。だいたい、5月の連休の頃に行く。松苗は、そのころには枯れていることもある。

昔から東九条では、八幡さんと春日さんだけは、そそうがないようにという感覚があった。八幡さんは、東九条の氏神さん。春日さんは、本来なら若宮さんへの信仰。今は若宮さんに受け付ける場所がないので、春日大社に行く。東九条は、春日さんの旧神領である。」

### まとめ

以上の5つの事例から、春日社旧神領で行われてきた松苗を用いた水口祭をまとめたい。まず松苗は、春日社の御田植の祭の後に、自治会長など町の代表者が春日社へもらいに行く。松苗は、町の各農家に配られる。配られた松苗は、ゴールド

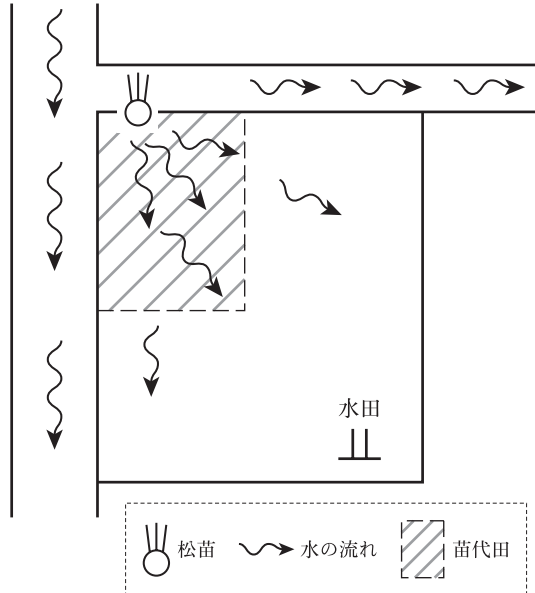


図6 松苗を水田の水口に飾ったときの水の流れ  
(筆者のイメージをもとにした高野明子氏による作図)

ンウィークである4月下旬から5月上旬の水口祭で用いられる。これは、各農家単位で行われる祭である。水口祭とは、稲の種籾を田に蒔いた苗代田に、その年に初めて水を入れる通水のときに行う祭である。各農家はこの水口祭のときに、自分の家の苗代田に水を入れる水口に、春日社からいただいた松苗を、季節の花などと共にささげるのである。図6は、この水口祭の時の水田を図化したものである。各農家は、自分の家の田に水を入れる水口に松苗があることにより、用水路から流れてきた一般の水が、水口で松苗を通過した水へと変化し、自分の田には松苗を通過した水が流れ込む構図になっている。そして、松苗を通過した水は、苗代田にまかれた稲の種籾に注がれ続ける構図となっている。

松苗を用いて水口祭を行う意味については、語りの中から、稲が育ちますよという祈りや、稲の苗が青々とそだちますよという祈り、と感じられていることがわかった。

春日社の松苗を用いた水口祭は、春日社の旧神領のみが行うことができる、特権的な意味合いがあった。春日社の旧神領には、かつて一段格上の扱いを受けた時代があった。そして、春日社の旧神領の人々にとっての春日とは、語りの中から、若宮さんであるという意識があることがわかった。

最後に、春日社の松苗を用いた水口祭における松苗の意味を読み解きたい。松苗を水口に飾ることにより、各農家の苗代田に注ぎ込まれる水は、一般の水ではなく、松苗を通過した水となっている。それでは、松苗を通過した水にはどのような意味があるのか。松苗とは、春日社の御田植の祭によって、春日の神の力が込められたものであった。つまり松苗は、一般の水を、春日の神の力のこもった聖なる水へと変換させる力があると信じられていたと考えられる。図7は、この内容を図化したものである。そして、このときの春日の神とは、若宮を意味していたと考えられる。そしてこの文化は、春日社の旧神領の人々のみが実践できる、特権的な文化であったと考えられる。

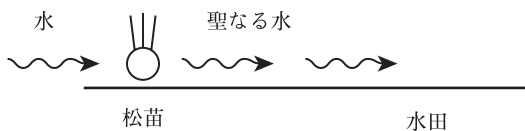


図7 水を聖なる水に変換する松苗の役割  
(筆者のイメージをもとにした高野明子氏による作図)

## 6. 結論

本章では、春日社の御田植の祭と水口祭において用いられた松苗儀礼の分析を通じて、奈良の旧神領の人々からみた春日の信仰の世界を表したい。

第2章から、春日の神は水神として信仰され続けてきたこと、そして春日の神は木々を青々とさせる力があると信じられてきたことがわかった。なおこの信仰は、奈良や大和国の人々にとっては、

中世の若宮誕生以降、若宮を中心とした信仰であった。

第3章から、春日社の御田植の祭は若宮の巫女を中心として、中・近世まで正月の申の日に行われ続けたこと、この祭は田作り、稲の種蒔植え、早苗の田植えまでの稲作作業を神の前で行う予祝儀礼であることがわかった。そしてこの祭を通じて、人々は春日の神、特に若宮の神に、その年の稲の実りを祈っていることもわかった。そして、申の日取りから、人々は若宮に、稲作の中でも水を期待していたこともうかがえた。そして、これらの春日の神の力は、祭で用いられた松苗に宿ると、人々は信じたと考えられる。

第4章から、春日社の御田植の祭で用いられた松苗が、稲の早苗を象徴するものであることと、春日の神が松葉を通じて米をつくる力があるという物語が中世から存在していたことがわかった。

第5章から、春日社の御田植の祭で用いられた松苗を、春日社の旧神領の人々は、自分の田の水田に水を入れる通水のときに、自分の田の水口に飾ることがわかった。このときの田は、稲の種蒔が蒔かれた苗代田である。この構図から、一般の水は、水口の松苗を通過して、春日の神の力が宿る、聖なる水に変換されると、人々は信じたと考えられる。

以上のことから推測すれば、春日社の旧神領の人々からみた春日の神とは、稲の実りをもたらす神であったと考えられる。具体的には、春日社の御田植の祭を通じて、松苗に春日の神の力が込められ、その松苗を自分の家の田の水口に飾ることによって、自分の田の水が一般の水から春日の神の力がこもった聖なる水に変換され、その水が自分の家の田の稲の種蒔を、松苗のように青々と茂る早苗に育ててくれると信じていたのだと考えられる。これを表したものが、図8である。

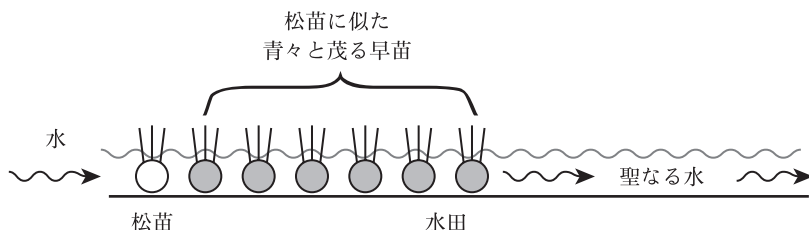


図8 松苗を通じた春日の神の力により、稲の種初が青々と茂る早苗へと育つ様子  
(筆者のイメージをもとにした高野明子氏による作図)

春日の神とは、水の神であり、水の力によって木々を青々と茂らせる神であった。春日社の旧神領の人々からみた春日の神とは、自分の水田の稲の種初を、春日の神の力の入った聖なる水の力によって、青々と茂る早苗へと育ててくれる神として受け入れられていた。人々は、春日社の信仰文化を自分たちの生活世界に取りこみ、再構成したものと考えられる。

このような信仰世界は、明治になり若宮の祭祀集団がなくなったことや、春日の神への信仰が薄れてきたこと、現在の稲作が昔のような苗代田を必要としなくなったこと等々から、消滅しかけている。しかしながら、春日社の御田植の祭と春日社旧神領の人々が行う水口祭の双方から松苗の儀礼を分析することを通じて、本稿では儀礼の中にこめられた春日の神への信仰の世界を読み解くことができた。

なお、本稿で取り上げた春日社配布の松苗を用いる水口祭は、春日社の旧神領の農家にのみ許された特権的な祭であった。一方で先行研究から、奈良県下では松苗などの模造苗を用いた祭が広く行われており、これは全国的にも珍しいことがわかっている。推測の域をでないものの、奈良県下で行われる松苗などの模造苗の信仰文化は、春日社と旧神領の人々による信仰文化をモデルとして、他地域の人々がそれぞれに縁のある寺社仏閣との間で再構成したものや、自らの鎮守の神社で再構

成したものである可能性があるのではないかと推測される。

#### 注

- (1) 地上における水のはじまりは、天から雨や雪として地上に降った水が、山の山頂や尾根に届き、そこから地上を下方に向かって流れ出していくものと、天から降った水が一度大地に浸透し、しばらく地下を通り抜けた後、湧き水として再び地上に湧き出し、そこから地上を下方に向かって流れ出していくものがある。本稿では、このうち前者の類の水を天水系の水、後者の類の水を地下水系の水と呼ぶこととする。
- (2) 山口泰代「聖地的山里室生の景観の構造——人を魅了する風景へのアプローチ——」人文地理 49-2, 1997年, 63-78頁。
- (3) 現在春日大社で2月と8月に行われる万燈籠は、この燈籠の故事ののりつものものである。
- (4) 現在、御蓋山は、春日社の管理下にあり、現在でも春日社の特別な行事以外は人の立ち入りを禁じられている聖地である。春日山は、奈良公園の公園の一部として国の管理下にあり、春日山原始林として、人の手を加えない自然な植生の状態で維持されている。現在、春日大社では、春日の山の文化が世界文化遺産に登録されたことをきっかけとして、御蓋山や春日山を一般の人々とともに登拝する活動を、年に4回ほど行っている。川合泰代「世界遺産登録を契機に生まれた新しい宗教文化——春日大社における春日山錬成会の活動から——」国立歴史民俗博物館研究報告 156, 2010年, 185-199頁。
- (5) 川合泰代「近世奈良町の春日講からみた『聖なる風景』」人文地理 58-2, 2006年, 57-72頁。
- (6) あらゆるものは、木・火・土・金・水の5つの要素の調和から成り立つという思想。中国から伝わったものであり、日本の信仰世界にも深く根ざ

している側面がある。5つの要素は、互いに生みあう相生の関係と、互いに剋しあう相剋の関係から成り立っている。相生の関係は、木が火を生み、火が土を生み、土が金を生み、金が水を生み、水が木を生む関係。相剋の関係は、木が土を剋し、土が水を剋し、水が火を剋し、火が金を剋し、金が木を剋す関係。

- (7) 鹿谷(1990)によると、史料から江戸時代には、このうちの1歌と3歌が使われ続けてきたことがわかる。明治7(1874)年の『藤のしなひ』(春日大社蔵)には、現在の2歌と、現在は使われていない4歌が追加されており、明治初期に御田植歌の再編成が行われたと考えられる。現在、4歌は歌われていない。4歌は下記のとおりである。「ちはやぶる神の杜のなかりせば 春日の原に粟まかましを ヤレヤレ…」。
- (8) 末文の「ヤレヤレ…」は、早乙女が移動する時のお囃子であり、早乙女が所定の位置に着くまで繰り返される。
- (9) 永島(1963, 1993)によると、中世の大和国には「大和は春日の神国」という思想が存在した。春日社の若宮の祭祀に深く関わる興福寺は、春日の神を祀っているという事実を根拠に、大和国で守護職級の力を有していた。そして、興福寺が抱える武士である衆徒・国民が、大和国においては他国の地頭級の役割を果たしていた。後に衆徒・国民は、大和国一の祭りである春日若宮おん祭の祭祀に深く関わることにより、その事実を自らの権力の根拠にした。大和国には「春日の神を祀るものは、その場所の支配者」という思想が存在し、春日を祀る場所や人は、ある種の「不入の権」を有していた。そのため、時の幕府などの権力者といえども、大和国において春日の神を祀る人や場所への介入が難しい側面があった。この思想は、中世においてもっとも強く力を発揮し、近世では江戸幕府の介入によりやや弱まったもののこの思想は維持された。近代以降は、春日社と興福寺の分離や、興福寺の一時的な廃寺などの変化に伴い、この思想は力を失っていった。このように、近世までの大和国では、春日の神を祀るということは、相当の特権を有することを意味していた。
- (10) 農家における春日社配布の松苗儀礼に関しては、中・近世における状況が分かる史料は、管見の限り存在しない。農家では、こういった類の儀礼を、文字や絵に残さないためであると考えられる。したがって資料としては、現在の農家における松苗儀礼の情報を用いるしかない。また現在では、旧神領の農家でも、松苗儀礼をおこなう農家は少な

い。これは、松苗儀礼の意味が、農家の人々にとっても、わかりにくくなっていることが誘因であると考えられる。松苗儀礼は、近世までの春日社と農家の人々で構築した世界であることから、近代以降の社会の変化に伴い、松苗儀礼の形は維持されつつも、その意味が不明瞭になっていったことが考えられる。この点において、現在の松苗儀礼は、近世までの松苗儀礼の形を、完全ではないとしても継承しており、そしてそのゆえに、儀礼の意味が人々にとっては不明瞭になっていると考えられる。本稿の5つの町の情報は、現状の史資料の制約を考えると、農家の松苗儀礼を考察するために妥当な資料と数であると考えられる。

- (11) 永島(1993)によれば、大和国は中近世において、「大和は春日の神国である」という思想が存在し、春日が大和国の実質的な一の宮であったし、また同時に大和国には「春日の神を祀るものは、その場所の支配者」という思想が存在し、春日の神を祀るということは、相当の特権を持つことを意味していた。このことから考えると、本稿で扱った春日社と春日社旧神領の人々が構築した松苗の信仰文化は、旧神領以外の人々にとっては実践したいが実践を許されなかった文化であったと考えられる。

#### 参考文献

- 大東延和『春日の神々への祈りの歴史』非売品, 1995年。
- 大東延和「春日お田植神事の由来——特に「松苗」を中心として——」春日文化4, 1996年, 143-148頁。
- 大宮守人「県内御田植祭の詞章について」奈良県立民俗博物館研究紀要5, 1981年, 27-40頁。
- 奥野義雄「予祝儀礼・御田植と中世農民——大田植と勸農の接点によせて——」奈良県立民俗博物館研究紀要5, 1981年, 11-26頁。
- 奥野義雄「水口祭と牛王宝印札——近世における農耕儀礼としての水口祭と牛王宝印札にみるまじない習俗——」奈良県立民俗博物館研究紀要19, 2002年, 27-34頁。
- 鹿谷 勲「春日大社の御田植行事(オンダ)」『奈良市民俗芸能調査報告書——田楽・相撲・翁・御田・神楽——』奈良市教育委員会, 1990年, 133-144頁。
- 徳田陽子「奈良県下の水口祭の諸相覚書」奈良県立民俗博物館研究紀要5, 1981年, 41-51頁。
- 永島福太郎『奈良』吉川弘文館, 1963年。
- 永島福太郎「大和は春日の神国」春日文化1, 1993年,

聖なる水の力による稲の早苗の成長への祈り

- 62-68 頁。
- 根津美術館学芸部編『(図録) 春日の風景 — 麗しき聖地のイメージ』根津美術館, 2011 年。
- 樋口 昭・岩坂七雄・池田 淳「大和の御田Ⅱ — 八乙女をめぐる —」埼玉大学紀要教育学部人文・社会科学 51(2), 2002 年, 27-41 頁。
- 藤本 愛「オンダ行事と伝承地の稲作農事暦 — 奈良県内のオンダ行事の地域的特色 —」日本民俗学 255, 2008 年, 33-65 頁。
- 武藤康弘「大和における御田植祭の系譜」万葉古代学 研究所年報告 4, 2006 年, 89-101 頁。
- 村井古道 (喜多野徳俊訳・注)『南都年中行事』文功社, 1979 年。
- 横山浩子「大和の龍神信仰」春日文化 4, 1996 年, 68-75 頁。
- 横山浩子「奈良県東部の龍神伝説と水神信仰覚書 — 猿沢池の龍神伝説をめぐる —」奈良県立民俗博物館研究紀要 15, 1997 年, 12-20 頁。
- 吉野裕子「春日大社の申祭」春日文化 1, 1993 年, 1-10 頁。